

2020年4月5日  
宮崎中部教会主日礼拝（棕櫚の主日）  
牧師 乾元美

マルコによる福音書 11：1～11  
ゼカリヤ書 9：9～10  
「子ろばに乗る王」

#### <棕櫚の主日>

今日は「棕櫚の主日」、受難週の始まりです。イエスさまは子ろばに乗って、エルサレムの町に入られました。この日から一週間の中に、イエスさまは十二弟子の一人のユダに裏切られて逮捕され、裁判にかかり、死刑の判決を受けて、十字架に架けられて死なれ、お墓に葬られます。

そして、次の日曜日に、死者の中から、神さまの力によって復活させられるのです。ですから、来週は復活祭、イースターとなります。

ところで、この受難週の始まりを、なぜ「棕櫚の主日」というのでしょうか。

それは、今日の聖書に、エルサレムの町に入るために、イエスさまが子ろばを手配され、お乗りになると、8節に「多くの人が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は野原から葉の付いた枝を切って来て道に敷いた」とあります。

この「葉の付いた枝」というのは、他の福音書では「なつめやしの枝」と書いてあります。「棕櫚」というのは、この「なつめやし」の別名です。

「なつめやしの枝」がどんなものかということ、それはずばり宮崎の木、フェニックスです。フェニックスは「ナツメヤシ属」だそうですね。ですから、まさにフェニックスをそのまま思い起こして頂ければ良いと思います。この「棕櫚」の説明で、どんな植物かを殆どの方と共有できるのは、宮崎ならではかも知れません！あれの枝を取って来て、人々はイエスさまが子ろばに乗って通られる道に敷いたのです。

棕櫚は、勝利の象徴とされていました。ですから、まさに勝利して凱旋する王さまにふさわしい植物とされて来たのです。

#### <預言の成就>

さて、どうしてイエスさまは、エルサレムの町に入るのに、わざわざ子ろばを用意して、それに乗って来られたのでしょうか。

それは、イエスさまが、旧約聖書の昔の時代から預言され、神さまが約束しておられた、救い主であること。すべてを支配するまことの王であることが、示されるためです。父なる神さまの救いのご計画が、このイエスさまによって実現することが明らかになるためです。

今日、読んでいただいた旧約聖書のゼカリヤ書 9章 9節には、まさにこの「まことの王の勝利の凱旋」の様子が預言されていました。もう一度お読みします。

「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者／高ぶることなく、ろばに乗って来る／雌ろばの子であるろばに乗って。」

「見よ、あなたの王が来る。」イエスさまは、まさにこのゼカリヤ書に預言された、人々を支配する、勝利の王として、エルサレムへ入って来られたのです。

#### <人々の期待>

また、多くの人々、つまりユダヤ人たちも、これまでイエスさまの教えや御業を見たり聞いたりして、この方こそ、私たちの救い主だ、預言された私たちの王さまだと、大きな期待を寄せていました。

そして、その方が、いよいよエルサレムへ入られます。エルサレムという町は、神さまを礼拝する神殿がある中心地であり、ユダヤ人の心の拠り所です。救い主がそこに来られたということは、いよいよ神さまの救いのご計画が実現する時が来た、ということなのです。

「子ろばに乗る」というのは、まさにゼカリヤ書が預言していた、来たるべき王さまの姿でした。それで人々はイエスさまを、旧約聖書に約束された王さま、救い主として、エルサレムの町に迎えたのです。

多くの人が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は野原から葉の付いた枝、棕櫚の枝を切って来て道に敷き、前を行く者も後に従う者も、皆が叫びました。

「ホサナ。主の名によって来られる方に、／祝福があるように。

我らの父ダビデの来るべき国に、／祝福があるように。いと高きところにホサナ。」

・・・ところがです。人々は、イエスさまがどのような救い主、どのような王さまであるかは、正しく理解していませんでした。

人々の叫び声は、こうです。「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。」

「ホサナ」というのは、「どうか救って下さい」という意味のヘブライ語です。救いを求める、祈りの叫びです。イエスさまが、旧約聖書に預言された神さまの救いを、実現する方であることは確かです。そして救いを叫び求めた。そして人々は、こう叫びました。「我らの父ダビデの来たるべき国に、祝福があるように。」

ユダヤ人たちは、自分たちの国、かつてのイスラエルを滅ぼされ、祖国を失っていました。当時のこのエルサレムの町も、支配していたのはローマ帝国であり、実際の権力を持っていたのは帝国の総督、ポンテオ・ピラトという人物でした。

そんな中でユダヤ人たちは、イスラエル王国が最も権勢を誇っていた、ダビデ王の時代のように、再びダビデの子孫から王がおこされ、この地上で王国を再建することを心から待ち望んでいたのです。そして、その自分たちの王国を再建してくれる、父ダビデの国を再び建ててくれる、力強いユダヤ人の王さまに、このイエスさまこそがなって下さるのではないかと。

そうして自分たちを救って下さるのではないか。それを期待し、願っていたのです。

<わたしたちの罪>

しかしイエスさまは、そのようなユダヤ人たちが願う理想の王さまではありませんでした。イエスさまは、地上の、ユダヤ人のためのイスラエル王国を築くために来られたのではありませんでした。

それはまさに、「子ろば」に乗って来られたことから分かります。地上の王ならば、自分の権力を見せつけるために、立派な馬や、戦車に乗って凱旋します。

でも、イエスさまは、まだ人も荷物も載せたことがないような、小さなろばの子に乗られました。おそらくヨタヨタとしか歩けなくて、なんだか心許ない、不格好な行進だったに違いありません。

しかし、この王さまはゼカリヤ書にあったように、「高ぶることのない方」です。自ら貧しくなり、小さくなり、弱くなり、人々共において、最後には自分の命を差し出して、罪人のために死んで下さる。そんな王さまなのです。権力や強い武力によって多くの人々や地域を力づくで支配するのではなく、ご自分の命を投げ打って、神さまの愛によって支配する。しかも、ユダヤ人だけでなく、諸国の民に、すべての人々に平和を告げて下さる。すべての人を救って下さる。そんな王さまなのです。

イエスさまはエルサレムに入ってから数日後、最後の晩餐を持たれた後に、ユダの裏切りによって、ユダヤ人の指導者たちに逮捕されてしまいます。そして、裁判にかけられます。

この棕櫚の日に、「ホサナ、ホサナ」とイエスさまを自分たちの王さまとして歓迎した人々も、数日後、イエスさまが裁判にかけられると、手のひらを返したように、「ホサナ」と叫んだその口で、「十字架につけろ」「十字架につけろ」と叫びました。

自分たちの国を再建し、諸国をも支配する王となる者が、裏切られたり、捕らえられたり、そんな無様なことになるはずがありません。人々は、自分の願いを叶えてくれないような、理想通りではないような、そんな王さまは要らなかったのです。そんな人物を救い主とは認めたくなかったのです。

そして、私たちもまた、これらの人々と同じなのではないでしょうか。

神さまに対して、救い主に対して、自分の願い、望みを叶えてくれるのなら、熱心に求め、迎え入れ、歓迎する。でも、自分の理想と違ったなら、自分の思い通りの救いではないなら、神さまを呪い、否定し、もういない、と捨て去ろうとするのです。

私たちは皆、まるで自分が王さまのようです。自分の理想が、自分の思いが実現することを望んでいます。それが救いだと思っています。そして、神さまさえも、救い主さえも、自分の思い通りに従わせようとしています。

ここに、まことの神を神としない、神さまに従うことの出来ない、私たち人間の深刻な罪、神の裁きを受けるべき、本当の罪があるのです。この私たちの罪が、神の御子であるイエスさまを、否定して、拒否して、十字架につけたのです。

## <まことの王>

しかし、神の御子であり、人を罪から救うために来られた、まことの王であるイエスさまは、ただひたすらに、神さまのご計画に従っていかれました。苦しみを受け入れ、辱めを受け入れ、十字架の死を受け入れて下さいました。そうして、敵対する人々を、私たちを、最後まで愛し抜いて下さったのです。

イエスさまが王としてエルサレムに来られたのは、まさにこうして、神さまから離れ、自分が王のように振る舞ったすべての人、つまり私たちの罪を引き受けて下さるためでした。私たちが味わうべき、神さまから離れ、神さまとの交わりを絶たれる、滅びの死を、ご自分の身にすべて担って下さるためでした。

そして、父なる神さまは、救いの御業を成し遂げ、十字架で死に、お墓に葬られたイエスさまを、死者の中から復活させ、勝利をお与えになります。

そうして、子ろばに乗って来られた、高ぶらない、低くへりくだられた王さまは、罪と死に、勝利を収められます。こうしてイエスさまは、人の罪を赦し、命を与え、私たちのまことの王となって、神に立ち帰ってこの救いを受け入れる者を、恵みの内に支配して下さるのです。

これが、神さまが与えようとして下さっている救いです。神の国、神のご支配です。

救いは、私の願いが叶うことや、波風立たない人生を送ることや、豊かな生活をするものではありません。

私の命を創造して下さった神さまの愛を知り、神さまのもとに立ち帰り、神さまと共に生きること。神さまが、いつも共にいて下さること。これこそ、救いなのです。

この救いを実現するために、まことの王となられるイエスさまは、低くなり、罪と死のどん底にいる私たちのところに来られました。そして、共にいて下さり、共に苦しみ、共に泣き、すべての重荷を、背負って下さったのです。

私たちは、イエスさまがどんな方であるか、どんな王さまであるかを、よく心に留めていきたいのです。この方は、子ろばに乗って来られ、貧しい人々、弱い人々、苦しむ人々と共にいて下さる王さまです。私たちの重荷を、罪を、苦しみを、病を、死を、共に担って下さり、引き受けて下さる王さまです。私たちのために呻き、苦しみ、血を流し、最後にはその命まで与えて下さる王さまです。

私たちをお造りになった神さまは、このようなお方なのです。これほどまでに、私たちを愛して下さる神さまなのです。

この方が、私たちの王となって下さいます。私たちの神となって下さいます。

この王さまのもとにこそ、世のどんな嵐の中でも見出すことが出来る、まことの平和があ

ります。悲しみの中にあっても、涙を止めて下さる、まことの希望と慰めがあります。

私たちは、自分が王であることを止めて、また世の虚しいものに従うのを止めて、このまことの王に、従う者になりたいのです。今は、世の様々な強い力が、私たちを支配し、覆い尽くし、打ち負かしてしまうように思われます。でも私たちは、決して見捨てない方。ご自身も死ぬばかりの悲しみ、苦しみを味わい、命を捨てても私を救って下さる、まことの王が来て下さり、共にいて下さるということを、しっかりと見つめていきたいのです。

「見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者／高ぶることなく、ろばに乗ってくる。雌ロバの子であるろばに乗って。」

### 【お祈り】

天の父なる神さま

受難週の始まりのこの日、神の御子イエスさまの十字架の苦難を覚えます。

それは、私たちの罪を赦すためにお受けになった苦しみであり、私たちに命を与えるための十字架でした。イエスさまは、私たちにご自分のすべてを与え、神さまの恵みのご支配を実現するために。罪と死から私たちを解放し、勝利し、まことの王となって下さるために、低くなって、来て下さいました。

これほどまでに、私たちを愛して下さる神さまの御心を、私たちが知ることが出来るようにして下さい。

今、世の中は恐れと混乱で満ちています。しかし、イエスさまが、いつも私たちと共にいて下さり、恵みの支配の中に置いて下さっていることを、覚えさせて下さい。確かな恵みによって、この時を耐え忍ぶ力をお与え下さい。

そして、苦しむ人々、悲しむ人々、疲れている人々、孤独を覚えている人々と、共にいて下さい。そして私たちもまた、祈りをもって、神さまに従い、神さまがなそうとしておられることに、仕えることが出来ますように。

このお祈りを、イエスさまの御名によって祈ります。アーメン